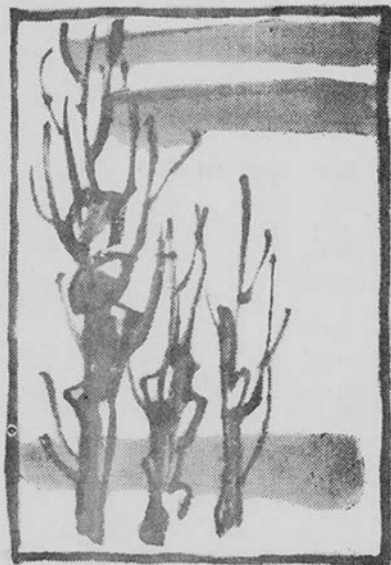


野城集

新 年 號



第 二 卷 第 一 號



磐城野新年號目次

とびら
瀧直枝

短歌
(三)

高久晚霞 新妻久満夫 清水延晴 橋本大學
佐久間安生 馬場芳月 松本勝雄 江尻秋穂
矢内悦子 鳥居高尊 會田忠一郎 平澤俊子
遠藤忠義 會田白葉 松本千秋 戸部曙歌
吉岡棟一 渡部朝村 矢吹正衛 矢吹正衛(二)

創刊號歌壇讀後感
萬葉集の磐城山の歌について
吉岡棟一 (一〇)

詩
山口英芳 咲田孝夫 遠藤忠義 松本千秋
吉成靜雪 千草ひろし 瀧直枝 戸部曙歌
後援の聲
編輯室の窓から
戸部生 (六)
表紙題字
表紙カット
戸部曙歌
田邊白

磐城野

新年號

新年を迎ひて

人生は苦惱の連鎖なりと
人生は憧憬と希望の連鎖なりと

苦惱は生あるものにのみあたへられた自然の送り物
憧憬と希望は若人にのみ意義ある思惟の源泉

恵まれたるかな。若きものゝ心。
恵まれたるかな「いわき」の同人よ

魂をみつめよ 勿して魂を愛せ
詩境にひたれ 勿して詩心を育くめ

新らしき年と 新らしき友よ
退嬰的になては不可ない。勿して共に
より深く思惟の扉をくり擴げ様ではないか

瀧直枝

短歌

舊師

高久晩霞

舊師みな在さぬ故郷の學びやに一人の御名をなつかしみ聞く
ありし日の遅ましさなほ衰へで頼もしわが師教壇に立たず
數々の思ひ出多き先生の舊性などをふと呼びしかな
古しへを榮えし國の夢の跡靜かに語るけ高き鑿の香（白水阿彌陀堂）
たくみ等が古き鑿あとわが郷に遺るといふは尊ときものを
美しき夕曉空をたたえつつ小添道を自動車に乗る（小瀧鑛泉）
海の音自動車音遠ひびき旅寮の吾れを慰むるがに
快よき温泉宿の朝や青空を上る陽温く初冬とあらず
暖かき冬の太空舞ふ鶯を見つつ憩ひてこころ春に居る
初冬の野にうらら陽を妻と浴びてふと思ふ吾等若かりし日を

冬雜詠（舊作）

新妻久満夫

靜もれる冬日たまりて海近き
松原の土に鳥の下りゐる
夜の雪淡らに降りてまちをゆく
馬車のあかりのおぼろなるかも

創刊號歌壇讀後感

矢吹正衛

佐久間安生氏

堅實な作風である。戸部氏の作と共に集中
の白眉であつた。
濁水のさほひ逆巻く崖岸に蜚揚さやかに落
けて和みの
崖岸に逆巻く濁流どもとして眼下の淀に踊
る白泡

これらはよく緊密に詩句を使ひこなして相
當な効果を上げてゐる。「黒々と」の歌もよい
たゞこの歌では「光りし岩でなく「光れる岩」
とありたい。次の歌も佳作である。

崖下を覗き見れば逆巻きて強き潮鳴りは
神經に應へぬ
「菅原の」は取材柄もあるが前四首に比して
すつと迫るところがない。寧ろこの歌よりは

「新らしき」の歌が高く評價出来る。
服部光雄氏

作歌を拜見するとかなり老練の方らしいが
描むらくは幻想的境地に徘徊されてゐること
である。氣分に甘へすぎてゐるとも云へる。

行きとほる家並の灯かげあかあかと
年深き町にとほり市張る

軒暗く木がらしの風ふくからに
砂巻く町を往きかてぬかも

冬の日のかけらふ庭の土寒し
煤けてたての枇杷の木むれ

おしつまりてみ雪いたれる山の肌
さむけくみつゝ歩み來にけり

うち仰ぐ枇杷の煤葉の靜もりて
雪ぞらいよよ曇りきにけり

鉾中に古つた制ひて日はぬくし
ささ揺れさせつ鳥こもるらし

砂巻きてひととき木がらしを
しばし立ち避け道ゆきにけり

樹を裂きて木がらしの風ひた走り
家居かなしも日の照りてあれど

小説的哀傷をたのしんでをられるやうにも見
える。

しらじらと渚に波の寄る見えて故なき泪頬
をながれぬ

松原の白砂にこゝろ愁ひ見る遠き岬の夕光
のいろ

歌はよくまとまつてゐてうまいものである
が、第一首四句第二首三句などは甘すぎて物
足りない。その他第三首一二句第五首四五句
などいづれもその傾向である。これは評者と
の短歌觀の相違と云へばそれまでであるが、
評者は現實的な出發をこそ希んでやまないの
である。

松本勝雄氏

幾重にも長々つづく掛楢の畦道遠く夕陽照
り映ゆ

幼いながら好意が持てた。が、第四首目五
句「犬もかよはす」等の句は氣障にきこえる。

第一首目の下句、第六首目下句「銀に光つて
分列飛行」の如きは調子にのりすぎて却つて
一首を軽くしてゐる。

永山忠治氏

宵更けて風吹きやみし静けさに夜學かへり
の下駄の音さゆ

○

清水延晴

昭和九年四月二十七日、桑折町に安藤野雁の遺墨展覧會を観

「野雁を語るの座談會」に臨席す

幼添ひの須磨子に死なれ容助となれる野雁を誰も知らざりき

「萬葉新考」死ぬまで離さざりしと云ふ野雁の心底を思ひ見むとす

(萬葉新考)は野雁の稿本

何處に行きても個性が邪魔になりたむ野雁は行路の視線に果てたる

世に容れられぬ個性は酒に振舞へる野雁の奇行をおしなべて見よ

「歌ともなくすすろに……」と詞書したる岩淵以後の風こそねたし

佐々木信綱が折紙をつけしと云ふ長歌のみを語りてすぎぬ

中途より草體となれる「去國歌」酔ひて書きけむ素振り想ほゆ「去國歌」の軸二首

無縁となりて幾年経けむ石塔額つく胸に松嶺め澄り(野雁の墓)

風背負ひ竹光差して酔ひどれの野雁立ちけむ門かこの家(野雁の家)

○

橋本大學

六ヶ年の同動は永き友を送ると開きし宴の時雨す(送別)

まことよき友と別るる宴にゐて盃は手に時雨耳にす

厳し親の言は術なし妹戀ふる心は捨てむと上京するか

隣家のラヂオの三味を聞きほけつ勤めの疲れ癒さむと床に

爆音に急ぎて見上ぐる空はるか機影はうろこ雲に没しぬ

濃霧せる朝の空に爆音のこもりひびけど見えぬ機影は

戸部君「磐城野」創刊す

勤めより雪の月を歸り來て先づ手にせるは友の創刊誌

ひた心磐城野にもる君が熱見つつ反省りて我をさみしむ

ひたきほひ友がはげめる様見つつ怠けくらせる我を反省す

夏井川溪谷(二)

佐久間安生

若島屋にて

雨後の峡川しるくどよもして冷酒汲める部屋にひびける

庭先の芝生が中の一むらの紅葉明るく晝陽射し來ぬ

もみじ葉に眞陽い照りつつ酒汲める部屋ぬちふかく映ゆる明るさ

雨後の陽射し明るきもみじ葉に未たを雨の雫や

冷酒に酔ひまわり來て部屋ぬちにうたたね久し夕となりぬ

峡川の水量減りて冷えひえとたぎつ瀬音の夜もすがら鳴る

近 詠

馬場芳月

落葉してはや高峯には雪見ゆる冬とはなりぬ爐邊にたしむ

この家に夢にありと思ひつつ門入る吾れは心しめゆく(曾祖母去の時)

やせしまま常のお面輪にい寝ますは逝きし婆とは思はれなく

この吾れにやさしき婆の逝きし後は逝きても唯に生ける思ひす

初 冬

松本勝雄

無難といふところ。(残り葉の歌は佳作)

會田白葉氏

荻原に夕時雨來て冷えしるくゆくりなく來

れば雫子啼き立つ

この一首は句々に調和を缺いてゐる。三句

に「荻原」をおき四五句「來ればゆくりなく」と

したいところである。「夢見に」の歌は下句が

思はせふりで甘い。

大崎銀鈴氏

初歩の方と見える。「ちかひし夜のちち色

の月」や「夢見つつ泪の日日を送りたり」のや

うな出立ち方をするよりは身邊の事象なり自

然寫生なりを如實に卒直に詠むことに習慣づ

けることが早道である。

根本正一氏

「夕されば」の歌は稍々よい。第二首五句「

かげ」はなかしい。斯ういふところは卒直に

「さびしくぞ見ゆ」と表す法が効果的である。

「埋もれる」の歌は佳い。

江尻秋徳氏

「妹の死」の歌いかにも幼稚な詠風であるが

純情が溢れてゐるので氣を引かれた。

朝風の冷たき庭に父上と稻こきければ汗に

じみ出つ

この歌では一二句と四句が矛盾してゐる。

「朝風は冷たかれどもひたむきに」位のところ

にして下句につづけた。

遠藤忠義氏

氏の歌はみな鋭がそろつてゐて愉快であつ

た。

秋の日ははや夕まけてうらさびし月出る頃

ほびぞ蟲啼き明みぬ

重々と矢大臣中腹に雲たれて月影さやに夕

べとなりぬ

風邪ひきて雨のあしたの氣うときは寝れつ

つ雨の音を聞きて居り

紅葉せし峡の面にうからと夢まきをなれば

夕時雨來ぬ

これらの歌は素直な作者の詩才が溢れてゐ

て愛誦に値ひする。但し「秋雨の軒うつ音の」

の如き古い歌言葉は無意識に出るものである

が、何か古風な感傷句である故避けたいもの

である。第五首六首などではよくまとまつて

ゐるが、この作者のレベルから云へば陳腐の

方である。

松本千秋氏

春めきし野に出て來れば陽はうらら霞める

空に雲雀なくこゝろ

眞晝日の照るぬくとさ縁先に想ふひときやすけかりけり
裏堀のかけひの水の冷えひえと夜更をすみて雪となるらし
簪へ立つ二ツ筒山にかゝる雲の赤々美しく朝焼にけり
顔覆の列車分解に工夫らの掛聲はつみ書をいきほふ
雪に明け雪に暮れつゝ今日の日も遠き君が身憶はるゝかも
雪もよう今宵の空はいつになく静もり冷えて川音牙ゆる

秋から冬へ

矢内悦子

針仕事倦意来しままに出てて見ぬ庭は淡き月の出てたる
秋雨の軒うつ音はいやしげく眠れぬ眼いよいよ牙え来ぬ
霜枯れの草むら渡る風冷えて月の光のいや牙えにけり
小夜更けを起き出て見れば月入りしあたりとぞ思ふ空明るめる

國寶三重の塔

鳥居高尊

登り行く山路はるかに森の間に御堂の屋根の見えていきほふ
森中を神しく登り来てあふき見にけり三重の塔

冬来る

江尻秋穂

起き出て見れば庭への柿の木に雀むれつつ寒き雨降る
麦まきの終へしやすけさうからの集ひてたぬし夕食につく
冷えし朝戸をくれば屋根毎に霜白白し冬もたけたる
爆竹のしじに響くと見し空の高高晴れて飛行機の飛ぶ

病院餘情(一)

會田忠一郎

手術後のしるき疲れか疼く身を忘れてしばしまとろみにけり
病院の晝はしつけしときおりを看護婦の行來室に洩れ來ぬ
ようやくに外出許されて看護婦につれられ來たる街のあかるさ

雑詠

平澤俊子

夕焼の空のうれしき明日は久しき友の訪ね來るてふ
コスモスの咲く色みれば一もとを吾れにあたへし友憶はるる
寢静まる頃を起き出て書讀みぬ夜汽車の音を遠く聞きつつ
弟と留守居しをれば小夜更けてラヂオの聲はひくくさみし
炬燵火はおとろへゆきて夜くたちぬ待つ父母は歸りおそしも

秋拾遺(二)

遠藤忠義

落葉せる峽にひねもす降る雨は夕べとなりて雪まじり來ぬ
雨降りて今日の氣うとさ室ぬちにひねもす居れば人の戀ほしき
書讀みて夜更し居れば狭庭への噴井の音は湧ひて聞ゆる
演習はたけなはとなりぬ散兵の銃剣の秀に日光りつ
演習の状況いえつつ教官のかこつは吾等いきどろしき
雨晴れて風吹き出でぬ山の秀に夕日照りつつ雲の流れらふ
山路ゆ見下す峽のたぎつ川水氣たちつつ朝明けにけり

下ノ關海峽

會田白葉

おだやかな詠風であるが取立てて云ふところもない。「カナリヤ」の歌には純情一途の風が見えた。とにかく來月を待つとしよう。

戸部曙歌氏

土砂降りの雨に勤めゆかへり來し間もあらばこそ亂打鳴る鐘

いきせきてはせ着き見しは顔覆の列車微塵なり折り重なりて

大破して機關車のめり微塵なる客車にうめく聲をうちに
列車顔覆とある歌であるが、これらは相當の出来栄である。かういふ事は容易に表し得ないのであるが、それを克服しやうとする意圖は敬意を表してよい。唯恐れるのは單なる報告になり勝ちなことであるが、前出二三首などはよくその域を脱してゐる。

(10、11、12)

後援の聲

新妻久満氏(十二月十三日)

「磐城野」發刊を御祝申上候將來細々御發展なさる事を祈申候
磐城野に芽だちよろしき花草を培ふ人に悲

あらすな

かがやかに雪かうむれる山のみれ見つつを
君は歌つくりあむ

寒々とみ雪いたれる山むらに歌びと囁歌は
ひそけくあらむ

いそがしきつとめのひまをひたぶるに歌よ
む君しぞくありけり

清水延晴氏(十二月十四日)

磐城野、御刊號拜見、實に見事なる出来栄えに御座候殊に活字のうつくしく印刷の鮮明なる地方誌として上乘と存じ申候

このうへは愈々内容に力を入れ量共に立派なるものとなさるやう御祈り申上候
吉岡棟一氏(十二月二十一日)

「磐城野」有難う御座いました。
雑誌全體の感じがとても明るくて氣に入りました。

實は前夜民報に縣歌壇回顧記を載せてしまつたのですが、こんなに綺麗な雑誌だったらもつと紹介するんだつたのになんて思ひました。
どうかこの雑誌を長くつづけていただきたいと思ひます。



星

朝空に
明滅せんとする星は
川の歌詞を聞く

雲

死んだ兄の映像は
夢の如く浮び
夢の如くに消えて行く

雪

貴女の映像がそつと
私の脳裡をおとすれる時
永遠にけがれない貴女の
純情に戀をささげる

東と西へ

お前は

東へ東へと

樂しみを求めて

進む

×

私は

西へ西へと

寂しさを求めて

松本千秋

進む

×

やがて

お互に逢ふ時

？？？

●●●

？と●の融合

そこに人間をはなれた私を見出すだろ

夜の感傷

吉成静雪

月のない夜に

川邊にたてば

そぞろ背を

思ひ出す

風がソツ！ときて

袂を揺する

草も揺れてる

サラサラサラと

川のほとりに

ホロホロホロと

鳴いて泣かせる



蟲ひとつ

愛情

夜の時雨。

街を彷徨する俺

時雨よ、

俺の體の中ほどまでも

しみ込め——。

冷え切つた俺の魂には、
時雨よ。

又、

何か俺は考へ様としてゐる。

ライフ三連譜

瀧

直枝

かつて——

幸福以上の幸福を求めあぐむた人……
かつて——その故に

涙の糧を得なければならなかつた人と
若ければ

千草ひろし

感情の溝をほり過ぎる 更に
自棄の一段階を歩み易い。

かつて——

言葉以上の世界にひたふとした人……

かつて——その故に

寂寥の門番となつて了つた人と

若ければ

理智のメスをとき過ぎる 更に

索漠たる人生と見做し易い。

かつて——

愛以上の愛を求めかねた人

かつて——その故に

神の言葉をきゝ得なかつた人と

若ければ

不成功の凡てを冷酷な神の裁斷も

認めすぎる 更に

ひゝがれた愛と叫び易い。

晩秋哀唱

戸部曙歌

しみじみと秋を吸へこんだ龍膽は、
草かげに青インクをこぼし、
肺を病む乙女の青白い指先が、

ウイオリンの音にふるいて、
ひややかに、ひややかに、
晩秋の空に反響し、はらはらと散る淡い哀愁。

夕

白鳥は、月をよぎり
忘れた人の涙に、神経をくだき
どす黒く凝った感情は、
忘れて行つた人の破片をかきあつめ、
丁寧に、つきあはせてはしみじみとする

白鳥は月の砂丘にからびた花と味気ない涙をまきちらし
私をかけめぐる。

謹賀新年

昭和十一年元旦

磐城野社

編輯室の窓から

愈々昭和十一年の春は明けた。昨年十二月颯々の聲をあ
げた磐城野は、しかも、ガチリとした足どりで第二回目の
足をふみ出した。

見て下さい。この健康な明るい姿を――

さア何をしでかすか、これからが見ものである。びゆん
／＼腕が鳴つてゐる。同人誌友の一致協力を希む。

創刊號は大好評だつた。苦しんだだけではあつたと思ふ。
今月も相當苦しんだだけあつて細いながら堅實した内容が
出来た。喜んでいただきたい。

御多忙中表紙カットをわづらはした川邊白氏後援をいた
ゞいた諸先輩に紙上にて深謝します。

本誌は一寸遅刊するかも知れないが、次號からは縮切日
をくりあげて行つて月初めに出したい。早々と原稿を送つ
ていただきたい。
(戸部生)

原稿締切 一月三十日

磐城野

頒價 拾錢
送料貳錢

昭和十一年一月十日印刷
昭和十一年一月二十日發行

福島縣石城郡川面村大字川前
字字根尻二四番地

編輯兼
發行者 戸部曙歌

東京市淀橋區柏木一ノ二八
印刷者 安田頼太郎

東京市淀橋區柏木一ノ二八
印刷所 安田邦文堂

福島縣石城郡川前村大字川前
字字根尻二四番地

發行所 磐城野社

三猿文庫